

北海道師範塾 塾頭通信

「教師の道」

第514号 平成25年3月21日

学力偏重？

2月17日付の釧路新聞に、「学力偏重教育に疑問」という見出しで記事が掲載されています。

この記事は、2月16日に釧路市民文化会館で行われた日本語学者の金田一秀穂氏の講演会の模様を紹介したものです。私は、金田一氏の講演を直接お聞きしていませんので、新聞記事の範囲でしか分かりませんが、「学力偏重教育に疑問を感じる。正解のない問題に頭をひねって答えを出す子どもを育てるべき」という趣旨の内容だったようです。



「学力偏重」という言葉に対して賛成する人はいないでしょうし、「学力向上」を目指す最近の風潮に対して批判的な方々からすれば、恐らくは「我が意を得たり」というところかも知れません。

北海道教育委員会はじめ各教育委員会や学校における「学力向上」に向けた取り組みについて、金田一氏がどのように評価しているかは承知していませんが、現状を見る限り、私には、北海道の取り組みが「学力向上」に偏重している様には思えません。

教育の眼目は、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」という3つの要素からなる「生きる力」の育成にあり、先般示された「北海道教育委員会執行方針」の中でも、「知・徳・体のバランスのとれた子どもの育成」を教育行政に臨む基本姿勢とすると述べています。

つまり、「確かな学力」さえ確保できれば他はどうでも良いという様な考えは、そもそも教育委員会にも学校にもありません。

今日の「学力向上」に向けた取り組みに対して、「当然だ」という意見や「学力偏重」だといった意見など賛否様々な意見が有りますが、どうも議論が噛み合っていないように感じるのは、「学力」とは何かという根源的な問題について共通認識が得られていないせいではないかと思われまます。

「学力」とは何かについて、広辞苑は、

「学習によって得られた能力」

「学業成績として表される能力」

と定義しています。これを一言でいえば「学んだ力」といえば良いでしょうか。

「学業成績として表される能力」といいますが、実際問題として、知識だけあっても良い成績を取れるとは限りません。問題を読み解く力が必要ですし、自分の知識を総動員して答えを導き出す力も必要になります。即ち、知識の量は「学力」の一部に過ぎない事という事です。

新学習指導要領の総則は、「学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、児童に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。」と述べています。即ち、「基礎的・基本的な知識や技能」はもとより、「学ぶ意欲」や「思考力・判断力・表現力」など幅広い能力を「学力」と捉え、それを確かなものして行く必要がるとしている訳ですが、こうして見ると、「学力」の定義は非常に幅広い事が分かりますし、ペーパーテストだけで学力の全てを推し量る事が難しい事も理解できると思います。

教育者の岸本裕史氏は、「学力」は氷山に似ているとといいます。氷山は一部しか水面の上に顔を出していませんが、「学力」も同様に「テストや通知簿で示される成績はいわば見える学力で、その見える学力の土台には見えない学力というものがあり、見える学力を確かに伸ばすためには見えない学力をうんと豊かに膨らませなければならない」と述べています。そして、その「見えない学力」を豊かにするためには、規則正しい生活やしつけ、読書習慣の定着などが必要であるとしています（岸本裕史著「見える学力、見えない学力」から）。

また、環太平洋大学長（元兵庫教育大学長）の梶田叡一氏もほぼ同様の考え方を示しており、学力を、

- ・知識・技能という「見える学力」

- ・思考力という「見えにくい学力」

- ・関心・意欲という「ほとんど見えない学力」に分類し、これらがバランスよく、しかも有機的に結びついていなければならないとしています。更に、「学ぶ」という働きからいうと、習得、活用、探究のバランスを考えなくてはならないとし、この

二重の意味でのバランスがとれた「学力」であることが必要だと述べています（梶田先生の教育コラムから）が、私もまた、「学力」は、単にペーパーテストで測る事が出来る知識や技術だけではないと理解しています。

平成19年から実施されている全国一斉の学力・学習状況調査に反対している方々も、その調査によって把握できるのは学力の一部に過ぎないと主張していますが、そんな事は当然であり、その事に異を唱える人はいないでしょう。私が理解できないのは、その事を理由にして、学力調査そのものに反対している事です。

私としては、調査によって把握が可能な分野であれば、臆せず調査をすべきだと思っています。

また、学力・学習状況調査は、子ども達を競争させるために行うものではなく、一人ひとりの子ども達の課題に対する通過力（正答率）を把握しようというものです。通過力が低いという事は、基礎学力の不足を示している事は確かであり、その原因を探り、改善策を講じるべきは当然の事です。

学力・学習状況調査に反対している方々は、あたかも子ども達の為にといわんばかりですが、私には、調査によって自分達の教育実践力が問われる事を恐れている様にしか映りません。

「学力」そのものは先程も述べたように幅広いものですので、「学力向上」というのは、単にテストの成績を引き上げるという事ではなく、「見える学力」から「見えない学力」を含め「確かな学力」をしっかりと身に付けさせようという取り組みに外なりません。少なくとも、「向上」と「偏重」は違うという事を理解していただきたいと思います。

北海道教育委員会は、子ども達の学力について平成26年度の調査までに全国平均並みにという事を目標にしています。いい換えれば、北海道の子ども達にも、せめて全国の大方の子ども達が身に付けている位の基礎的な学力を身に付けて欲しいという、ささやかな期待です。もしも、その程度の努力さへも放棄するというなら、公教育の担い手たる資格はないでしょう。

「人が自立して、みずから己の運命を開拓していくとき、世の中が見えていなければなりません。世の中が見える力は、基礎学力を土台としてこそ、はじめてまっとうについてくるのです。今日、基礎学力の有無は、生きていく上で決定的な条件となっています。」

これは、先程紹介した岸本氏の言葉であり、私も全く同感です。それ故私は、北海道の子ども達に対して、読み、書き、計算を含めた基礎基本の学力をしっかりと身に付けさせるべきであり、その為にあらゆる力を糾合し、全力を尽くさなければならぬと申し上げているのです。（塾頭：吉田 洋一）